

はれるが、公は祖父公爵(篤磨公の父上は公 11 才の時に亡くなられた)に二令弟、津軽英麿、常盤井鶴松両氏の独乙留学を熱心に勤説され、両氏を Bonn に迎えて Dr. Rein 邸に寄居せしめ、公自身は隣家に寄寓され、殊に 1887 (明. 20) 年夏には Dr. Rein の指導で Geneve から Alps を越え、Italy に、更に Swiss を経て 30 日後に帰独。この時も Dr. Rein は恐らく学生旅行の躰を忘れず、助手 Schulze 氏、公、津軽、常盤井、品川弥一郎、池田秀男、松井武太郎の同勢 8 人、各自が行李を負い、木杖をつき、ひたすら車馬を斥けて経費の節約につとめられ、さすが若い公達をして悲鳴をあげさせたとのことである。また前記の新戸渡博士は Rein 邸に寄宿して万般の世話を受けられたし、明治の元老西園寺公望公爵の嗣子八郎氏も三宅先生と同時代に留学、Rein 邸に起居して大学に通い、やはり校正に参加されたようである。このように Dr. Rein は日本人留学生の就学、住居に至る迄親身になって世話をされた外、毎年 11 月 3 日の天長節には、Bonn 大学に留学中の日本人全部を自邸に招いて祝賀会を催された由である。如何に Dr. Rein が日本に好意を持っておられたかがうかがわれる。日本政府も Dr. Rein に勲三等を贈ってこれに報い、後に勲二等に陞叙したという。そして三宅先生の再度の渡欧 (1911, 明. 44) に Dr. Rein を訪問された時には大学を退かれ (1910 隠退)、多少老衰の色も見え、字を書く時も手先が震えておられたそうである。

実に Dr. Rein は大の親日家で、当時の我留学生の父として懇切に指導された一方、日本の地理学並びに生物学についても大きな貢献をされた人であることを再び認識したい。同時に我三宅驥一先生が、彼の大著「日本」に関係されたことも、ここに御披露致す次第で、承ると先生は昨年米寿に達せられたそうで、ここに先生の御長寿を祝い再度お知らせ下さった御礼を申述べ、また辻村太郎、猪熊泰三両博士の助言を謝して筆を擱く次第である。なお肖像は地質学教室に長く勤務された故石崎順吾画伯が写真から画かれたものである。

参 考：三宅先生の書簡；霞山会編：近衛霞山公(大.13)；山崎直方：ライン先生とライン文庫，地理学評論 I, 383 (大.14)；石井満：新渡戸稲造伝(昭.9)。

(国立博物館文化財保護部)

□ L. Benson: **Plant taxonomy: methods and principles**, 494 pp., Ronald Press Company, New York, 1962 この本は植物分類の基礎的な(ここではテクニカルな)事がらについて教科書的に解説してある。Part 1 には植物分類学のデータはいかにして集められるかを述べ、Part 2 では分類ということがどういうことか、種とか属の概念、分類のテクニックというようなものについて述べ、Part 3 で命名規約の適用のし方をいくつかの例と共に解説、Part 4 では key のつくり方、記載の書き方、Part 5 ではモノグラフ研究の方法が解説してある。この本の大半は Part 1 にさかれているが、豊富な写真版が用いられて楽しませてくれる。分類の理論的な追求という点では欠けているが、テクニックの点では参考にはなる。\$11.50 (約 4,600 円)。 (井上 浩)